秋はなほ夕まぐれこそただならね荻の上風萩の下露

―和漢朗詠集の秋の夕（秋興・秋晩）について―

田中幹子

道心厚い美貌の貴公子、藤原義孝の「秋はなほ夕まぐれこそただならね荻の上風萩の下露」は、秋の夕を代表歌である。黄昏時、秋風になびく荻の花穂、色つく萩の下葉の白露に、早逝した義孝の人生を重ね、愛唱されたのだろう。しかしこの歌は、歌自体に名歌としての力がある。

平安人に一つの秋の美意識を作った白楽天の「暮立」詩を上の句で主題として言い切っている点、漢詩素材「荻」と和歌素材「萩」を初めて組み合わせ、「上風」「下露」と漢詩的対称表現で詠んだ点である。

和漢兼作の才人義孝ならではのこの歌を、時を経て、同じく和漢すべてに通じる藤原公任が『和漢朗詠集』「秋興」に採り、その価値を決定付けた。

はじめに
一　「暮立」詩と「夕まぐれこそただならね」
二　斎宮女御歌「あやしきほどの夕暮に」
三　漢詩素材「荻」と和歌素材「萩」
四　「秋興」と「春興」

はじめに

藤原公任撰『和漢朗詠集』の「秋興」には、後世、秋の夕の名歌とされた一条摂政伊尹の息子、藤原義孝の歌が採られている。

秋はなほ夕まぐれこそただならね荻の上風萩の下露
（秋興・229）[注1]

藤原義孝は、兄挙賢とともに美貌を讃えられた近衛少将だったが、疱瘡のため、天延二（974）九月十六日の朝に挙賢が、夕に義孝が亡くなった。義孝はまだ二十一歳であり、道心厚い人柄も相まって、その早逝が多くの人に惜しまれた。死後、母や妹の夢枕に立ち詠んだ歌が『後拾遺集』に採られ、その説話が『江談抄』始め『栄華物語』『大鏡』等にも採られている。『拾遺集』以来、勅撰集に十一首入集しているが、百人一首に「君がため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひぬるかな」（後拾遺・恋二・669）歌が採られたのも、若く散った人生と重ね合わせての受容かと思われる。

「秋はなほ」歌も荻の蕭々たる秋風、はかない萩の白露の取り合せが、早逝した義孝の人生を連想させ、愛唱されたのであろう。[注2] しかしこの歌は、著名な歌にも関わらず、勅撰集に採られていない。「秋はなほ」歌の典拠となったのは『和漢朗詠集』であった。いわば『和漢朗詠集』が、「秋はなほ」歌に秋の代表歌の地位を与えたのである。

『和漢朗詠集』の上巻は、四季に従い項目を立て、それぞれの項目にふさわしい漢詩句と和歌を選んでいる。「秋はなほ」歌は、その中の「秋興」項目に収められている。

『和漢朗詠集』「秋興」に「秋はなほ」歌が選ばれた意図を考察し、この和歌の魅力に迫りたい。

一、「暮立」詩と「夕まぐれこそただならね」

『和漢朗詠集』「秋興」の内容は次の通りである。

221　林間煖酒焼紅葉　石上題詩掃緑苔　白楽天
林間に酒を煖めて紅葉を焼く　石上に詩を題して緑苔を掃ふ

222　楚思眇茫雲水冷　商声清脆管絃秋　白楽天
楚思眇茫として雲水冷まじ　商声清脆として管絃秋なり

223　大底四時心惣苦　就中腸断是秋天　白楽天
大底四時心惣べて苦なり　就中に腸の断ゆることはこれ秋の天

224　物色自堪傷客意　宜将愁字作秋心　小野篁
物の色は自ら客の意を傷ましむるに堪へたり　宜なり愁の字をもて秋の心に作れること

225 由来感思在秋天　多被当時節物牽　　島田忠臣

由来思ひを感ずることは秋の天に在り
多くは当時の節物に牽かれたり

226 第一傷心何処最　竹風鳴葉月明前　　島田忠臣

第一に心を傷ましむることは何れの処か最なる
竹風葉を鳴らす月の明らかなる前

227 蜀茶漸忘浮花味　楚練新伝擣雪声　　高丘相如

蜀茶は漸くに浮花の味ひを忘る　楚練は新たに雪
を擣つ声を伝ふ

228 うづらなく磐余の野辺の秋萩を思ふ人とも見つる今
日かな　　丹比国人

229 秋はなほ夕まぐれこそただならね荻の上風萩の下露
　　義孝少将

「秋興」の「興」は、興趣のことである。「秋興」には、秋の興趣を代表する詩歌が集まっている。落葉を焚いた火で酒を煖め、苔むした石を掃って、そこに詩を書く221、陰陽五行の秋の色の白を、蜀茶の泡や雪のような絹で表現した227も秋の興趣にふさわしい。

しかし「秋興」の真髄は、白楽天の223「大底四時心惣べて苦なり　就中に腸の断ゆることはこれ秋の天」の詩句である。四季はすべて美しく、すべて心を切なくさせるが、腸を断つほど最も切なくさせるものは秋の天である。平安人は、この詩句に心惹かれた。224の秋の風情すべては、旅人の心を切なくさせる、秋の心で愁の文字を作るのも尤である、という小野篁の詩句も223の詩句と同じ心である。225、226の島田忠臣の「由来思ひを感ずることは秋の天に在り」の「由来」は、223の「就中に腸の断ゆることはこれ秋の天」の詩句をさす。

「秋はなほ」歌も、223の詩句と大きく関わると思われる。この詩句の典拠をあげたい。

暮立（0790）　　白楽天

黄昏独立仏堂前　　黄昏　独り立つ　仏堂の前
満地槐花満樹蟬　　満地の槐花　満樹の蟬
大底四時心惣苦　　大底四時心惣べて苦なり
就中腸断是秋天　　就中に腸の断ゆることはこれ秋の
天

槐の花が一面に散り、秋の蟬の声を聞きながら、一人仏堂の前にただずむ。四季はすべて愁いがあるが、とりわけ秋は腸がよじれるほど悲しい。この秋の愁いの舞台が「暮立」の「暮」、夕である。最も切ないものは秋の夕という発想で、まず思い浮ぶのは『枕草子』である。

春は曙。やうやう白く成り行く山際、少し明りて、紫立ちたる雲の、ほそくたなびきたる。

夏は夜。月の頃はさらなり。――略――。

秋は夕暮。夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、烏の、寝所へ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。まいて、雁などの列ねたるがいと小さく見ゆるは、いとをかし。日入りはてて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。

（枕草子・一段）

「春は曙」「夏は夜」ともに「秋は夕暮」と言い切る。上野理氏は「秋は夕暮」の美意識が白楽天の「暮立」詩によると指摘されている。[注3]「秋は夕暮」こそがすばらしい。この言い切りは義孝の「秋はなほ夕まぐれこそただならね」歌の「秋はやはり夕暮こそが、普通ではなく優れているのである」という言い切りと同じである。「秋はなほ」歌の特徴の第一は、上の句の言い切りにある。

この歌が「ただならね」と言い切る点が印象的であることは、『撰集抄』の説話からもうかがえる。

昔、一条摂政のみなもとにて、人々連歌侍りけるに、
　秋はなほ夕まぐれこそただならね
と云句の出たりけるを、人々こゑたびたびになりけれど、付る人も侍らざりけるに、摂政殿の御子に義孝少将とて、十三になり給ひけるが、
　荻の上風萩の下露
とつけ給へりければ、殿おほきに御感侍りて、これをばうちこめてはあるべきかとて　――略――

（撰集抄・第二十九　義孝少将連歌之事）

「秋はなほ夕まぐれこそただならね」に付ける句を皆困っていた中で、十三歳の義孝が「荻の上風萩の下露」と付け句をして父伊尹を感心させたという内容である。なぜこの和歌が、連歌として受容されたのか。それはこの和歌が上の句と下の句の間で大きく断絶しているからである。断絶は「夕まぐれこそただならね」という言い切りの強さによる。

二、斎宮女御歌「あやしきほどの夕暮に」

「ただならね」という表現は、『源氏物語』「夕顔」の「清げにてただならず気色よしづきて」のように、散文の表現であって、管見のかぎり、「秋はなほ」歌以前に歌の用例は見当たらない。「秋はなほ夕まぐれこそただならね」は、「秋は、やはり夕暮こそが普通ではない」の意である。秋の夕暮が、普通ではなく美しく、哀しく、切ないと上の句で言い切っている。この上の句は、「暮立」詩「大底四時心惣べて苦なり　就中に腸の断ゆることはこれ秋の天」に基づいた表現であり、この歌の主題にもなっていると考えられる。

「秋はなほ」歌の主題となる「暮立」詩がこの歌に至る

までどのように受容されたかを見て行きたい。

前章で、小野篁や島田忠臣の詩句が「暮立」詩の影響を受けていることを述べた。平安詩だけでなく、「暮立」詩の影響を受けた和歌は、「秋はなほ」歌以前に既に『古今集』に見られる。

いつはとは時はわかねど秋の夜ぞ物思ふことの限りなりける　（古今・秋上・189）

いつの時節も物思いはするもので、いつとは決めかねるが、なんといっても秋の夜こそが物思いの極みであるよ、という内容は、明らかに白楽天の「暮立」詩の「大底四時心惣べて苦なり　就中に腸の断ゆることはこれ秋の天」を踏まえている。秋の夜長の物思いは恋の愁いに通じる。後世に影響を与えた「暮立」詩の受容歌は、直訳的な「いつはとは」の秋歌よりも、次に引く読人知らずの恋歌であった。

いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べはあやしかりけり　（古今・恋一・546）

いつの時節も恋慕わしくない時はないけれども、秋の夕は特に、不思議に恋慕わしい気持ちになる。平安人が「暮立」詩を恋の愁いと受容する背景には『万葉集』からの伝統があった。秋の夕は『万葉集』で恋の舞台となっていた。「君待つと我が恋ひ居れば我がやどの簾動かし秋の風吹く」（万葉・巻四・491）は、恋慕いながら家に居ると秋の夕風が、恋人の訪れを連想させる、という内容である。このように秋の夕は、『万葉集』から物思いの時であった。よって、恋の愁いとして「暮立」詩を受容した「いつとても」歌が後世に影響を与えたのである。次にあげる斎宮女御の歌も、「いつとても」歌を受容したものである。

秋の日のあやしきほどの夕暮れに荻吹く風の音ぞ聞こゆる　（斎宮女御集・15・後拾遺・秋上・319・初句「さらでだに」）

上の句「秋の日のあやしきほどの夕暮れに」は、古今集歌「いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べはあやしかりけり」（古今・恋一・546）を踏まえた表現である。この和歌は『後拾遺集』に秋上に初句を「さらでだに」に変えて収められている。「さらでだに」ならば、ただでさえ秋の夕はあやしいのに、と「いつとても」歌を前提にしていることがより明らかになる。

この詞書は『斎宮女御集』と『後拾遺集』ではやや異なる。『斎宮女御集』では、次のとおりである。

上、久しく渡らせ給はぬ秋の夕暮れに、琴をいとをかしう弾き給ふに、上、白き御衣のなえたるを奉りて、いそぎ渡らせ給ひて、御かたわらに居させ給へど、人のおはするとも見入れさせ給はぬ気色にて、弾き給ふを聞こしめせば　（斎宮女御集・15）

夜離れの続くつれづれを忘れるため、女御は琴を弾く。その音色があまりにすばらしいので、村上天皇がなえやかな白い美しいお召物で、急いでお渡りになって女御の傍らにお座りになった。しかし女御は天皇にまったく気づかない様子で、無心に弾きながら、「秋の日のあやしきほどの夕暮れに」歌を思わず呟いたという内容である。[注4]

同じ歌の詞書が『後拾遺集』では、次のようになる。

村上御時、八月許、上久しく渡らせ給はで、忍びて渡らせ給けるを知らず顔にて琴に弾き侍ける　（後拾遺・秋上・319）

ここでの女御は、天皇の訪れを知っていながら「知らず顔」という設定となっている。天皇の久しぶりの訪れを、あたかも女御がすねているかのようにも読み取れる。

ただでさえ秋の夕は不思議に人恋しいのに、今日は荻吹く風が一段と切なくさせる。諸注の中には、「荻吹く風」を天皇の訪れと解釈している説もあるが疑問である。[注5] この歌は、天皇の訪れを気づいても、本当に気づかなくても、誰もいないと思って詠んだという前提に立った歌である。また秋の夕に加え、「荻吹く風」がさらに切なくさせるのだから、「荻吹く風」を天皇の訪れと解釈するには無理があるように思う。この「荻」はいわゆる恋人になびく「そよ」に繋がる「荻」ではなく、孤独を象徴させる存在である。[注6]

孤独を感じさせる「荻吹く風」の中、女御は、琴を弾いている。この状況でまず思い浮かべるのは、白楽天の「琵琶行」である。

琵琶行（0603）　白楽天

潯陽江頭夜送客　楓葉荻花秋瑟瑟
主人下馬客在船　挙酒欲飲無管絃
醉不成歓慘将別　別時茫茫江浸月
忽聞水上琵琶声　主人忘帰客不発
――略――
潯陽江の頭に夜、友を送れば、楓の葉や荻の花穂が淋しく秋風に揺れていた。月明りの許、別れの盃を酌み交わすが、音楽も無く、酔えず、殺伐たる思いで、将に別れようとする時、茫茫たる江月を浸す。
忽ち聞く　水上琵琶の声
主人は帰るを忘れ　客は発せず

とする時、どこからともなく水上から琵琶の音がする。以下、略した後半の梗概を述べたい。白楽天達は、その音を辿り、一人の女性を見い出した。彼女はやがて、はかなく浮世に翻弄された人生を振り返り、語り聞かせた。そして今、自分を受け入れてくれない留守がちの夫への淋しさを忘れるかのように、一人琵琶を弾くのであるという。彼らは、彼女に同情し、彼女のすばらしい音に耳を傾けた、という内容で、平安人にとっては周知の詩である。

荻吹く風の中、孤独をかこちながら一心に琵琶を弾く女性は、そのまま斎宮女御の姿に通じる。下の句「荻吹く風の音ぞ聞こゆる」中で琴を弾く設定は、「琵琶行」からの発想であろう。そして上の句「秋の日のあやしきほどの夕暮れに」が「暮立」詩を受容している。

この斎宮女御歌が義孝の「秋はなほ」歌に大きく影響を与えたと思う。古今集歌「いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べはあやしかりけり」を経由したとはいえ、上の句で「暮立」詩を踏まえている点の他、「琵琶行」を踏まえていると思われる下の句「荻吹く風」も義孝歌の「荻の上風」を連想させる。

三、漢詩素材「荻」と和歌素材「萩」

「秋はなほ」歌の下の句「荻の上風萩の下露」について考えたい。

荻は『万葉集』に既に詠まれていたが、用例は三例と少なく、平安になってからさかんに詠まれた素材である。この背景には平安人が愛した「琵琶行」が影響していると思われる。

「琵琶行」は男女の別れの詩ではないが、友と別れる場を詠んだものであり、男同志の友情の漢詩を男女の愛情に置き換えて和文にすることは、平安人の基本的受容態度である。『新撰朗詠集』では、「琵琶行」の「潯陽江の頭夜客を送る　楓葉荻花秋瑟瑟」を「餞別」に採られている。

また、十世紀前半の漢詩句撰集『千載佳句』「餞別」には白楽天の友、元稹の荻の詩句が採られている。

落日樽前添別思　碧潭灘上荻花秋　元稹
碧潭灘上荻花秋　（千載佳句・餞別・送二故人一帰レ府・926）

黄褐色の花穂が風になびく風情は女性を連想させるのか、荻の歌は、なまめかしい歌が多い。[注7] 後撰集歌「いとどしく物思ふやどの荻の葉に秋と告げる風のわびしさ」（後撰・秋上・220）は「秋」と「飽き」を掛け、それを告げるのが荻に吹く風と詠んでいる。この和歌も斎宮女御の「さらでだにあやしきほどの夕暮れに荻吹く風の音ぞ聞こゆる」の背景となっているように思われる。

別れを予感させる「飽き」に通じる秋風になびく荻は、なまめかしいが、「そよ」となびく荻ではなく、つれづれに琵琶弾く女性の背景に「瑟瑟」と吹く荻であり、蕭々とした風情である。「琵琶行」の印象の強い荻は、秋風に揺れる姿が平安朝漢詩に数多く詠まれた、漢詩的素材である。義孝の「荻の上風」には、斎宮女御の「荻吹く風」を経由させた漢詩的発想の表現なのである。[注8]

一方、萩は『万葉集』に百四十一例と最も多く詠まれた素材である。しかし、管見の限り、萩を詠んだ漢詩文は見当たらない。[注9] おおまかに言えば、萩は和歌の素材、荻は漢詩の素材なのである。萩は露と組合わせも数多い。

秋萩に置ける白露朝な朝な玉としそ見る置ける白露
（万葉・巻十・詠レ露・2172）

赤紫の萩の花の上にたっぷり白露が置く実景が詠まれている。しかし「秋はなほ」歌の露は萩の下葉に付いている。義孝以前に「下葉」と「露」が組合わさせている例として藤原伊衡の歌をあげたい。

白露は上より置くをいかなれば萩の下葉のまづもみづらん
（拾遺・雑下・藤原伊衡・513）

黄色くもみじした萩の下葉を見て、露は置くものだから上から色づくはずなのに、なぜ下から色づくのだろうかと理に勝った内容である。露けき萩が眼前にあるのではなく、もみじさせるものは露であるという類型的発想の詠みである。義孝の「萩の下露」という表現は、同じく観念的ながら理屈で詠んでいる印象はない。むしろ余分なものをそぎとった美を感じる。それは「荻の上風」と番いになっているためである。

「秋はなほ」歌のもう一つの魅力は、「荻の上風」と「萩の下露」の取合せにある。「荻」と「萩」の取り合わせは、この和歌以前には見られない。水辺の荻と野辺の萩の取り合わせは、実景では詠まれない。ただならない秋の夕の美の典型として、初めて取合わされた素材なのである。

また「上風」と「下露」という組合わせもこの和歌以前には見られない。この対照的表現は、漢詩に常套的に用いられる方法である。

漢詩的素材の「荻」と和歌的素材「萩」の取合せや、「上風」「下露」の対照表現は、和漢兼作の才人義孝にして初めて創造できたのである。

『大鏡』は、小野宮実資の夢に現われた義孝の詩句を伝える。[注10]

さて後に、小野宮のおとどの御夢に、おもしろき花のかげにおはしけるを、うつつにも語らひたまひし御仲にて「いかでかくは。いづくにか」とめづらしがり申したまふければ、その御いらへに

昔契蓬來宮裏月　昔は契りき　蓬來宮の裏の月に
今遊極楽界中風　今は遊ぶ　極楽界の中の風に
とぞ宣ひけるは、極楽に生れたまへるにぞあなる。
（大鏡・太政大臣伊尹・謙徳公）

義孝が死後、生前、親交のあった実資に夢に現われる。花の蔭にいる義孝に、実資が「どうしたのか。今どこに」と問うと、「昔契蓬來宮裏月、今遊極楽界中風（昔は、蓬來宮のような宮中であなたと親交を結び、今は、極楽の花の風に吹かれて一人遊んでいる）」と漢詩を詠んだという。

『義孝集』（80）にこの漢詩句が置かれている。

さらに『和漢朗詠集』「無常」に次の詩句が採られている。

朝有紅顔誇世路　朝に紅顔あつて世路に誇れども
暮為白骨朽郊原　暮に白骨となつて郊原に朽ちぬ
義孝少将
（和漢朗詠・無常・793）

この詩句は出典未詳であるが『和漢朗詠集』「無常」に入集以来、人生の無常を説くものとして誦詠された。「朝」と「暮」、「紅顔」と「白骨」、「世路」と「郊原」、「誇る」と「朽ちぬ」の対象は、そのまま「荻の上風萩の下露」に通じる、漢詩では常套的な異種の素材の対照的表現である。

「秋はなほ」歌は、まず上の句で白楽天「暮立」詩の「大底四時心惣べて苦なり　就中に腸の断ゆることはこれ秋の天」の詩句に基づいて「秋はなほ夕まぐれこそただならね」と言い切った。そして下の句で「荻の上風」「萩の下露」という義孝以前に誰も思いつかなかった、異種の取り合わせをむだのない表現で詠んだ。義孝は秋の夕の美を具体的に示したのである。

この和歌の魅力は、上の句で「暮立」詩を主題にすることを明示し、下の句でそれを具体化した点である。

ここで改めて「秋はなほ夕まぐれこそただならね荻の上風萩の下露」歌が『和漢朗詠集』「秋興」に採られた意味を考えたい。

四、「秋興」と「春興」

『和漢朗詠集』は、『古今集』に倣い、春と秋が対応するよう部立を設けている。「春興」には「秋興」が対応し、主に郊外で春・秋の興趣を感じる詩歌を集めている。「秋興」の代表が、白楽天の「大底四時心惣べて苦なり、就中に腸の断ゆることはこれ秋の天」（223）であるのに対し、「春興」の代表的作品は、劉禹錫の次の詩句である。

19　野草芳菲紅錦地　遊糸繚乱碧羅天　劉禹錫
野草芳菲たり紅錦の地、遊糸繚乱たり碧羅の天
（和漢朗詠・春興）

「秋興」の切ない「秋天」に比べ、「春興」の「碧羅天」は陽気で華やかである。野に広がる紅の錦の花々、陽炎揺らぎ、輝く碧の薄衣の空、華やかな春の郊外の風景が詠まれている。[注11] 紅と碧の色対は、「秋興」の「林間に酒を煖めて紅葉を焼く　石上に詩を題して緑苔を掃ふ」（221）の「紅葉」と「緑苔」にも見られる。しかし、落葉を焚き、酒を煖め、苔を掃い詩を作すという淋しい光景の紅と緑は、豪華な「春興」に比べれば、くすんだ色彩である。

次に「春興」「秋興」の和歌を比較したい。

25　ももしきの大宮人はいとまあれや桜かざして今日も暮しつ
赤人[注12]

26　春はなほ我にて知りぬ花ざかり心のどけき人はあらじな
忠岑
（和漢朗詠・春興）

「ももしきの」歌は、春の野辺の遊覧におおらかに興じている人々が詠まれている。一方「春はなほ」歌は、花盛りの頃は、花が気になり、人はのどかな心ではいられないと、華やかな春の永日を逆説的に表現している。公任は、花盛りに心浮かれる人々の様子に「春興」を象徴させた。「春興」歌に比べ、「秋興」歌は切なく淋しい。

228　うづらなく磐余の野辺の秋萩を思ふ人とも見つる今日かな
丹比国人

229　秋はなほ夕まぐれこそただならね荻の上風萩の下露
義孝少将
（和漢朗詠・秋興）

「秋興」の「うづらなく」（228）という秋の野辺になびく萩の花穂に、思い人を見い出して逍遥する万葉歌には、「春興」の春の野辺で遊覧しながら、花をかざす大宮人を見い出す「ももしきの」（25）万葉歌が対応する。「春はなほ」（26）歌に対応するのが、義孝の「秋はなほ」（229）歌である。華いだ「春はなほ」歌は、かそけき「秋はなほ」歌と対照的でありながら、春の真髄を知っているのは我だけだという姿勢が、秋の夕の美を我一人で極めようとしている義孝歌とどこか通じる。[注13] 公任は、明らかについになるよう「春興」「秋興」を作り上げている。

三木雅博氏は、『和漢朗詠集』の構造は、『古今集』に準じたものであり、春の項目（立春・早春・春興・春夜・三月尽）と、秋の項目（立秋・早秋・秋興・秋夜・九月尽）は基本的に対応していると指摘された。その上で春・秋の対立的構造をあえて壊してまで「秋興」の次に「秋晩」の部を設けていることを指摘された。[注14]「秋晩」項目の詩歌は以下のとおりである。

230　相思夕上松臺立　蚕思蟬声満耳秋
白楽天

相思うて夕に松臺に上て立てれば　蚕の思ひ蟬の声耳に満てる秋なり

231　望山幽月猶蔵影　聴砌飛泉転倍声　　菅原文時

山を望めば幽月なほ影を蔵す　砌に聴けば飛泉うたた声を倍す

232　小倉山ふもとの野辺の花すすきほのかに見ゆる秋の夕暮れ

（和漢朗詠・秋晩）

230の秋の夕の松台に聴こえる虫の音、231のかすかな月の光と滝の音、232の秋の夕暮れの野辺の花すすき等これらの情景はひそやかで淋しい。ほのかに見える花すすきは、任氏伝の美女を連想させる幻想的な趣向である。あえて『和漢朗詠集』に「秋晩」項目を設けた美意識が、『後拾遺集』に突然現われる秋の夕歌群に影響を与えたことが、川村晃生氏によって指摘されている。(注15)

「秋はなほ」歌に影響を与えた閨怨詩的な斎宮女御の「さらでだに」歌が、『後拾遺集』では「秋上」に配され、秋の夕歌群を作っていた。『後拾遺集』の秋の夕歌群に大きな影響を与えた『和漢朗詠集』の「秋晩」項目の直前に置かれたのが、「秋興」の義孝歌「秋はなお夕まぐれこそただならね」(229)だった。

この歌を「秋晩」ではなく「秋興」に採ったのは、主題である「暮立」詩の「大底四時心惣べて苦なり　就中に腸の断ゆることはこれ秋の天」詩句を「秋興」の中心に据えたからであろう。

秋の夕を「ただならね」と言い切る明快さは、『枕草子』の「秋は夕暮」を連想させる。しかし何よりこの和歌の魅力は、「暮立」に基づいた上の句の秋の夕の舞台に、漢詩的な表現方法の「荻の上風萩の下露」というむだをそぎとった美を配したことである。公任がこの和歌を『和漢朗詠集』に選んだのも、これこそ和と漢の融合の美と評価したためであろう。

『大鏡』に「かやうにも夢など示いたまはずとも、この人の御往生疑ひ申すべきならず」とまで言わしめた義孝は、往生だけでなく、「秋はなほ」歌が『和漢朗詠集』に収められたことにより、より一層、秋の夕の名歌の作者として永遠の命を得たのである。

（注）

（注1）　本稿の和歌は『新編国歌大観』、『白氏文集』は本文を那波本、『千載佳句』は金子彦二郎氏『平安時代文学と白氏文集――句題和歌・千載佳句研究篇――』、番号は花房英樹氏の『白氏文集の批判的研究』による。『枕草子』は三巻本、『撰集抄』は岩波文庫本、『大鏡』は古典文学全集によった。但し、これらの本文の漢字は適宜、私に改めた。

（注2）　『源氏物語』「乙女」「時雨うちして荻の上風もただならぬ夕暮れに」や『栄華物語』「鳥辺野」「かくて八月ばかりになれば――略――荻の上風萩の下露もいとど御耳にとまりて」等、『和漢朗詠集』とほぼ同時代に人々に愛唱されていたことが伺われる。

（注3）　「暮立」詩と対応するのが、白楽天の「早春憶二蘇州一寄二夢得一」(3109)の「呉苑四時風景好、就中偏好是春天」であり、この二句の美意識に影響され、『枕草子』冒頭表現となったことを上野理氏、松田豊子氏が指摘されている。(上野理氏『後拾遺集前後』笠間書院　昭和五十一年・松田豊子氏『清少納言の独創表現』風間書房　昭和五十八年三月)

（注4）　『斎宮女御集注釈』(平安文学輪読会　塙書房　昭和五十六年九月)を参考にした。

（注5）　川村晃生氏『後拾遺和歌集』(和泉古典叢書5　和泉書院　平成三年三月)では、「荻吹く音は、人の訪れの比喩」として「主上の渡御と荻の葉音」と解釈され、通釈も「ただでさえ不思議に人恋しい夕暮に、荻の葉風の音が聞こえること（お見えなのですね）」とされる。

（注6）　恋人にそよと答える「荻」の歌は、「一人していかにせましとわびつればそよとも前の荻ぞこたふる」(大和物語・一四八段)や「いつしかと待ちしかひなく秋風にそよとばかりも荻の音せぬ」(後拾遺・雑二・源道済・949)等がある。

（注7）　『源氏物語』「夕顔」「『ほのかにも軒端の荻をむすばずは露のかことを何にかけまし』高やかなる荻につけて、「忍びて」、と宣へれど、――略――『ほのめかす風につけても下荻の半ばは霜にむすぼほれつつ』」の「軒端の荻」の名も背の高さのみならず、「そよ」と誘いにたやすくなびく風情からの由来であろう。

（注8）　たとえば、『田氏家集』下巻(168)「七言　重陽後節題二秋叢一応製一首」の「薇蕪枝格沙虫孔、蘆荻□承閣鳳巣」等に用例が見られる。

（注9）　平安漢文には「萩」はないが、「萩」をさすものとして「鹿鳴草」が「和名抄」にある。この名は和歌を由来としたものであろう。

（注10）　『大鏡』「伊尹謙徳公」伝の義孝の説話として次のような記事がある。賀縁阿闍梨という僧の夢に義孝が現われ、淋しそうな顔も見せないのを阿闍梨がなじると義孝が「時雨とは蓮の花ぞ散りまがふなに故郷に袖濡らすらむ」(後拾遺・哀傷・599・第二句「千種の花ぞ」、第四句「なに故郷の」、義孝集・79)と詠んだというこの説話はこの他『江談抄』『宝物集』『今昔物語』等に採られている。極楽では時雨とは蓮花が散花することであり何を歎くことがあろうか、と往生した人のみが詠める歌である。

（注11）　「遊糸」の解釈は大曽根章介氏(『和漢朗詠集』新潮古典集成)によった。川口久雄氏(『和漢朗詠集』岩波古典文学大系)は蜘蛛の子（ゴサマア）説を採る。

（注12）　原典である『万葉集』では「梅をかざして」であった。

（注13）　この指摘は三木雅博先生に指導して頂きました。

（注14）　三木雅博氏『和漢朗詠集とその享受』(勉誠社　平成七年九月)

（注15）　川村晃生氏『摂関期和歌史の研究』(三弥井書院　平成三年)